概念構造からの anaphor と logophor への統一的アプローチの試み

文と文断片の *self* 代名詞

永次　健人

英語の *self* 代名詞の容認性は伝統的に束縛条件 A により説明されてきたが、Ross (1970)、Kuno (1987)などで反例が示されてきた。Kuno (1987)、Reinhart and Reuland (1993)などは、束縛条件 A に違反する *self* 代名詞が anaphor ではなく logophoric な照応表現、logophor であるとしている。Reinhart and Reuland (1993) (以下、R&R）は anaphor と logophor の分布に関して、次のような一般化を提唱している。

(1) A *self*-pronoun is anaphor iff it is an argument of a *syntactic* predicate; otherwise it is a logophor.

R&R では syntactic predicate を全ての項が統語的に実現している述語と定義している。R&R は anaphor の局所性条件として、束縛条件 A の代わりに(2)を提案している。

(2) *Condition A*
A reflexive-marked syntactic predicate is reflexive. (Reinhart and Reuland (1993))

(2)は形式から意味へのマッピングに関する制約だが、意味から形式へのマッピングについては(3)の制約が提案されている。

(3) *Condition B*
A reflexive semantic predicate is reflexive-marked. (Reinhart and Reuland (1993))

(3)は同じ述語の項動詞が同一指示を持つとき、そのうち一つの項が anaphor であることを要求する。

R&R による項構造に基づく *self* 代名詞の分布の説明は経験的に妥当に思えるが、logophor を説明対象外にしてしまい、*self* 代名詞について統一的説明を与られない。Nagatsugu (2019) は、束縛を CS における構造関係であるとみなした Jackendoff (1990)と Culicover and Jackendoff (2005)に基づき、上記の R&R の分析を CS へのマッピングの観点から捉えなおし、(4)を提案した。(4)における“X^{α} > α” の階層性については、(5)を想定する。

(4) Syntax: NP_i *oneself*$_i$
CS: $[F (\ldots [X^{\alpha}]_i \ldots [\alpha]_j \ldots)]$ (X^{α} > α) (Adapted from Nagatsugu (2019))

(5) *Argument Hierarchy*
Agent > Patient/Beneficiary > Goal/Source/…

一方、logophor である *self* 代名詞については、(6)を提案している。

(6) Syntax: *oneself*$_i$
CS: $[SAY/THINK/HEAR ([X]^{\alpha}, [\ldots [\alpha]_i \ldots]]$ (Adapted from Nagatsugu (2019))

Logophor の場合、*self* 代名詞の先行詞は明示的に表れる必要がないため、(7)の統語表示には先行詞ＮＰは示されていない。Logohpor が logophoric trigger/logo center を先行詞にすることから、*α* を束縛する変項 *X* は *SAY* などの logophoric な CS 述語の外項となる。Nagatsugu (2019)

では、(4)と(6)は独立した規則のままだったが、ここではこれらを(7)のように統一することを提案する。

(7) ***CS Binding***

Syntax: *oneself*$_i$

CS: $[X^{\alpha}]_i$ … $[\alpha]_j$ $(X^{\alpha} > \alpha)$

Anaphor と logophor の違いは、“$X^{\alpha} > \alpha$”の階層性の定義によって得られる。*Self* 代名詞が項のときは(5)が適用され、項で無いときは(8)が適用される。

(8) *CS-Embeddedness Hierarchy*

X > Y iff

[… X … (…[…) [… Y …

つまり、(8)は無標の場合の制約となる。これは、*self* 代名詞は logophor であるのが default であり、項のときにのみに anaphor というより制限の強いものとなることを示唆する (*cf.* Reuland (2011: 145))。

上記の分析により、文断片における *self* 代名詞の一見例外的な振る舞いも予測される。*Self* 代名詞は文断片として表れるとき、束縛条件 A を無視することが観察されてきた (Ginzburg and Sag (2000)他) 。この事実に関して、Nagatsugu (2018)は *self* 代名詞の文断片は意味的に項であるかどうかにかかわらず、logophor として振る舞うと論じている。Nagatsugu (2018)では、文断片の直接生成分析に基づき、*self* 代名詞の文断片は非明示的な統語要素を持たず、そのため、統語的な項とはならず、anaphor とみなされないとしている。

しかし、Nagatsugu (2018)では、統語的項／述語という概念の言語システム上の位置づけは明確にされなかった。Nagatsugu (2019)では、Jackendoff (2002)などで提案されている三部門並列モデル(Parallel Architecture)の下で *self* 代名詞の文断片を分析しているが、表層的かつ単一の統語構造を想定するこのモデルでは、*self* 代名詞が統語的な項である場合とそうではない場合を区別するのは難しい。CS が述語の項構造と必ずしも一致しないことも考慮にいれると、項構造を扱う中間的な表示レベルが必要となる。ここでの *self* 代名詞の分析は、文法的制約の適用において、項構造レベルが優先され、述語・節を超えるレベルの制約はその後に適用されることを示している。

***References*:**

Culicover, P. W. and R. Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, OUP, Oxford. / Ginzburg, J. and I. A. Sag (2000) *Interrogative Investigations: The Form, Meaning, and Use of English Interrogatives*, CSLI Publications, Stanford, CA. / Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, MA. / Jackendoff, R. (2002) *Foundations of Language: Brain, Meaning, Grammar, Evolution*, OUP, Oxford. / Kuno, S. (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*, University of Chicago Press, Chicago, IL. / Nagatsugu, K. (2018) “Fragments of Self-Pronouns in English: A Direct Generation Analysis,” *English Language and Linguistics* 24, 121-142. / Nagatsugu, K. (2019) *A Study of Sentence Fragments: Direct Generation in Parallel Architecture*, Unpublished doctoral dissertation, Kyushu University. / Reinhart, T. and E. Reuland (1993) "Reflexivity," *LI* 24, 657-720. / Reuland, E. (2011) *Anaphor and Language Design*, MIT Press, Cambridge, MA. / Ross, J. R. (1970) “On Declarative Sentences,” *Reading in English Transformational Grammar*, ed. by R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum, Ginn and Company, Waltham, MA.